西谷啓治における「空」

信田和紀

序論

今回の卒業論文でテキストとして使用した「宗教とは何か」は、その表題から素直に我々が期待するような、既存の宗教についての宗教論でも宗教入門書でもない。著者である西谷啓治は、本書の主題について「ここで試みた省察は、近代という歴史的境位に潜んでいると思われる問題を通して、人間存在の根底を掘り返し、同時に「実在」（リアリティ）の源泉を探りなおすという、そういう意図のもとで宗教を問題にしている」と述べている。つまり本書は、人間のうちから宗教というものが起こってくる「もと」を現在における自己の身上に主体的に探求するという方法で、宗教の核心について考えるものである。

この卒業論文は、このような西谷の思索にのっとって、宗教の根源について考察するものである。その方法として、西谷の論述を整理して再構成する形で考察を進めていくこととする。

第１章　近代科学と有神論

我々が一般的に考える宗教とは、普段それなしで生きている人間が大部分であり、衣食住のような意味で必要不可欠なものではない。宗教とは、我々人間の「生」の問題に深く関係しているものである。「生」の問題とは我々人間の存在の根底において、「生」と「死」が常に隣接して存在していて、我々の日常が、一瞬にして無に帰する可能性を常に秘めている非常に不安定なものであるという問題であり。いわゆる「無常」の問題である。日常生活において不必要であった宗教は、このような我々の存在についての「無常」が自覚されたときに、はじめて必要とされるのである。

人間は従来、自身のあり方について、通常の生活から超越した「神」の存在によって外的に存在目的を規定されていた。しかし、近代科学の発達によって、神の不在が証明されることになる。この証明によって、我々は、それまで「神」によって規定されていた我々の存在目的を喪失してしまうことになった。その結果人間は、いったい何のために存在しているのか、世界がいったい何のために存在しているのかを見失い、「消費」「快楽」といった剥き出しの欲求と、科学によって発見された多くの法則に従ってただ生きることを余儀なくされた。このような多くの喪失を背景にして「虚無」が現れることになる。

第２章　虚無

このような、「虚無」の自己の存在に関する拠り所なきことによって、我々の背後には等しく「疑」が現れることになる。この「疑」は、世界に存在するすべてのものに等しく提示される問題であり、このすべてのものに等しくというのが重要な役目を果たすことになる。我々は普段、「意識」を通して主観的にこの世界と接している。逆に言えば、我々は普

段、「意識」を通さずに世界に接することはできず、主観的な判断をする限りものの本質を知ることはできない。西谷はこうした意識による断絶がある限り、すべてのものは分かり合うことのできない孤独なものとして世界に存在することになると考えた。西谷は、このような世界観を「有」にとらわれた「有の場」と呼んだ。

このような他者とわかりあうことのない「有の場」で、神の代わりに現れることになった虚無は、すべてのものに等しく「疑」という問題を提示する。「疑」は、すべてのものの根底に等しく存在し、すべてのものが等しくたどり着くという性質を持つ。そのため、虚無には、何ともわかりあえない「有の場」からの脱自を自覚させるという性質がある。

しかし、「虚無」はこのような性質を持つ一方、「有」に依存するという性質も併せ持つ。我々は虚無から逃れることは出来ない。なぜならば、ものの「有」には必ず虚無が対応して存在しているからである。しかし、逆に言えば虚無は対応する「有」なしで独立して存在することは出来ないということになる。つまり、この性質は、虚無が必ず何かを否定して存在しうる、それ自身として独立することのないものであるということを現している。

つまり、虚無は「有の場」を否定することで現れる「無の場」と呼べるが、この「無」とは、「有」という対象がなければ成り立たない相対的な「無」であり、「無」自身として独立してあることができないため、虚無によって自覚される脱自は真の脱自ではないのである。

第 3 章　空の場

「空」とは、西谷啓治の中心概念であり、西谷は彼の師であった西田幾多郎の「絶対無の場所」の哲学を受け継いで、それを「空の場」として考えている。

西谷は「空」について「「空」とは、そこに於いて我々が具体的な人間として、即ち人格のみならず身体も含めた一個の人間として、如実に現成しているところであると同時に、我々を取り巻くあらゆる事物が如実に現成しているところでもある。」と述べている。虚無は「有」を否定することで成り立っているが、空はその虚無をさらに否定することで成り立っている。つまり空は、否定を徹底することでその否定を肯定に転じさせるのである。その肯定こそが、西谷の考える「如実に現成する」ということである。

空の場における「もの」のあり方は、通常我々には言いあらわすことはできない。なぜなら、先にも述べたように有の場では、意識によって主体と客体が断絶されているため、空の場における直接的な「もの」のあり方に、本当に触れることができないからである。しかし、虚無を経た空の場では、虚無によってすでにこの断絶の壁が取り除かれているため、「もの」に直接的に触れることが可能になるのである。この主客合一の立場を西谷は「回互的体系」と呼んでいる。

「回互的体系」が成立し、否定の徹底によって存在の肯定がなされる空の場では、ものの存在は、それまでの場でなされていたように他に依存するのではなく、それ自身として独立し、「あるがままにある」ことができるのである。この「あるがままにある」というこ

とこそが、虚無がなし得なかった「真の脱自」であるということなのである。

また、外部に依存しない「あるがままにある」ということには、本質的に「遊び」の性格が含まれている。「遊び」とは自発的で、真に自己目的的であるということであり、すべてが自己の内部から生じてくるということである。遊びとしてのあり方とは、ある重荷を外部から背負わされるのではなく、自発的に自分から背負うということなのである。

西谷の「空」の思想はキリスト教における「おのれの如く隣人を愛せよ」という命題における「愛」の概念に当てはまると西谷は考えている。それはこの命題において自愛を否定するで、他者への愛が成立するという原理が、西谷の「空」における回互的体系と合致するからである。そこから西谷はさらに、キリスト教では人間だけが対象だったが、対象を人間だけでなくあらゆるものに当てはまる愛であると考え、それを空における「愛」の概念であるとした。

終章　まとめ

西谷啓治の思想の特徴は、中世ドイツのキリスト教神学者マイスター・エックハルト（Meister Eckhart）の考えた、神の神性として神のみが持ちえていた「絶対無」という特性を、われわれの自己の此岸の奥深くに見出したことである。西谷は「絶対無」を、「主体的存在をも含めて一切の存在が如実に立てられるところ」であると考え、虚無のように対他的に存在するのではなく、それ自身として独立的に存在できるものであると考えた。

西谷は、この著書の中で「絶対無」を我々の此岸に見出したことによって、従来信仰されていた宗教の根源を明らかにしたといえる。従来、宗教における神と呼ばれるものだけが持ち得た神の特性としての「絶対無」が、我々人間の此岸にも見出されるということは、神が我々の外部に存在して我々を支配しているのではく、我々の内部に存在すると言えるということである。それはつまり、神という宗教において絶対的無二であった存在が、世界に唯一つ存在しているのではなく、人間の個々の内に、それまで神と呼ばれていたものが存在しているということである。

しかし、ここで神となるのは人間だけではない。空の思想における「愛」の回互的体系によって、世界のありとあらゆるものが等しく「無」を持っていることが明らかになるため、世界に存在するもの全てが神として、本質的にそのものの「あるがままにある」存在するということである。

私は今回の卒業論文を通して、西谷啓治の「空」の思想は、従来の宗教の立場であった「有神論」、科学による従来の宗教の否定によって現れた「無神論」に続いて、人間の本質が神であると考える、「人神論」的な立場、ひいては世界に存在するすべてのものが神として「あるがままに」あるとする、「全神論」的な立場であると言えるのではないかと考えた。